

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

朔は高二の冬、高速バスの事故にあつて視力を失った。同じバスに乗っていた弟の新は軽傷ですんだものの、兄の失明に責任を感じ、将来を期待されていたマラソンをやめた。ケガの治療後、盲学校で過ごしていた朔は、一年ぶりに帰宅し、ガールフレンドの梓を通じて新がマラソンをやめたことを知る。

「本当に大丈夫なの？ お母さん、車で送ってあげようか」

昨日から何度も同じことを繰り返す母親に、いい加減、朔も閉口した。

「もしなにかあったら」

「母さん、オレをいくつだと思ってるの？ アズも一緒なんだし、心配ないから」

朔がため息をつく横で、梓は笑顔を見せた。

「おばさん、この時間なら電車も混んでいないし、絶対に無理はしませんから」

梓が言うと、加子は大きく息をついた。

「それじゃあ気を付けてね。そうだ、向こうに着いたら電話してちょうだ」

「母さんっ」

「わかったわよ。梓ちゃんよろしくお願いね」

「はい」

「じゃあ、行ってくるから」

「気を付けてね」

はいはいと頷きながら朔は（注二）白杖を手にして玄関のドアを押した。

朔が家に戻って一ヶ月になる。これまで、近所の店や公園に出かけることはあったけれど、電車を使って外出は今日が初めてだ。

「母さん、まだこっち見てるんじゃない？」

まさか、と振り返った梓が「わっ」と声を漏らした。

「さすが朔、お見通しだね」

「二十年近く、息子をやっているんで」

なるほどと、うなる様に朔は苦笑した。

最寄り駅から東京行き快速に乗ると、梓は朔の腕を引いて座席に座った。

「空いてよかったね」

顔を向けると、朔は①さつきより少しやわらいた表情をしていた。

外を歩くときの朔は、口数も少なく、表情もかたい。隣を歩いても、緊張しているのがわかる。

「平日の昼間だからなあ」

「でも少し時間がずれると、けっこう学生がいるよ」

話しながら梓が正面に顔を向けると、前の座席に座っている中年の女が白杖に視線をとめて、朔を見ていた。梓がその女を見返していると、ふいに目が合い、女はまばたきをしながら視線をそらして目をつぶった。

「どうかした？」

「え？ ううん。それよりいまから会う人って、盲学校の先生なんですよ？」

「境野さかのさんね。先生じゃなくて、月に一、二度学校に来る人」

「ボランティアさん？」

「そんな感じ」

② ふーん、と曇くもった返事をする梓に「ん？」と朔が首を傾かしげると、梓は肩かたをあげた。

「だったら、もう少し気を遣つかってくれたっていいのに」

「気を遣つかう？」

「最寄駅まで来てくれるとか」

梓は窓の外に目を向けた。

「それは違ちがうんじゃないかな」

「えっ？」

「だってオレから連絡して、都合つけてもらってるわけだし」

「それはそうかもしれないけど」

梓の不満な声に朔は鼻をこすった。

「アズは、オレが視覚障害者だから、境野さんは気を遣うべきだって思ってるんじゃない？」

③ 梓は朔を見て、視線をさげた。

「オレは嬉しかった。境野さんが新宿でって言うってくれて」

「……………」

「と言っても、結局アズに迷惑かけちゃってるんだけど」

「迷惑なんて思っていないよ」

「うん……。ありがとう」

「ありがとうとかもない。ふたりで出かけるのって久しぶりだし、わたしだって嬉しいし」

梓が言うと、朔は柔らかなく口角をあげた。

三十分ほどして新宿駅に着いた。車内は空いていたけれど、新宿駅は平日の日中でも大勢の人が足早に行きかっている。

ホームに降りた途端、発車を知らせるメロディーや構内放送、行きかう人の足音に話し声……、あらゆる音が洪水のように朔の耳に流れ込んできた。白杖を握る手が汗ばむ。ずっと息を吸い、白杖を握り直したとき、うしろからどんと誰かが肩にぶつかった。

バランスを崩す。一瞬、朔は立っている方向を見失った。

「朔、大丈夫？」

梓の手を背中に感じて首肯したけれど、声が出なかった。前からうしろから、あらゆる方向に人が行きかう。杖を動かすとはじかれそうになる。

梓は朔の左腕をつかんでびたりとからだを寄せた。

「エスカレーター点検中だ・階段で行くけど」

「大丈夫」

階段の前で梓が足を止めると、うしろの男が舌打ちして抜かしていった。足の裏で丸い点字ブロックをとらえる。

「手すり持ったほうがいいでしょ」

梓が右側に移って背中に手を当てた。

階段の高さや幅を白杖で確かめて。朔は足を上げた。わきが汗ばみ、呼吸が浅くなる。

「あともう少し」

梓の声の直後、手すりが水平になり足元にまた点字ブロックを感じた。

梓が右側に立つと、朔は反射的に梓の腕をつかんだ。

新宿駅は何度も利用したことのある駅だ。ホームから改札までの構造もだいたい頭に入っている。そのつもりだったのに、立っている方向がわからなくなった途端、すべてが飛んだ。

「ごめん」

「なに？」と首を傾げる梓に、ううん、と朔はかぶりを降った。

待ち合わせの店は、駅から徒歩五分ほどのところにあるカフェだった。

入り口のドアを開けると、カランコロンとカウベルが音を立て、珈琲の香ばしい匂いがした。

④ 滝本君！

店の奥から声が聞こえると、朔はほっと息をついて声のほうにからだを向けた。梓が同じほうに顔を向けると、窓際の席で四十歳くらいの細身の男が右手をあげていた。

「元気そうだね」

「境野さんも」

「なんとかね。えっと、彼女は？」

境野は梓のほうに目をやって、どうもと笑みを浮かべた。

「上城梓です。初めまして」

「こんにちは。なんだ滝本君は彼女いたのか。ちっともそんな話しないからさ」

「聞かれてませんし、言いませんよ、わざわざ」

朔は苦笑した。

「まあ座ろう。ここの珈琲美味しいんだよ。滝本君、珈琲好きだろ。上城さんはなににする？」

「じゃあわたしも同じもので」

境野は珈琲を三つ注文すると、「水の入ったグラスは正面、その左におしぼりを置くよ」と、グラスを朔の前に、左側におしぼりを置いた。

「どうも」と朔はグラスに手を伸ばして、口を湿らせると顔をあげた。

「それで、電話でお話したことなんですけど」

「ああ、(注三) ブラインド馬拉ソンのことだよね」

「やってみたいんです、オレ」

「えっ！」

梓の声に、境野が驚いたように顔をあげた。

「あ、すみません。ちよつとびっくりしちやって」

そう言っ梓はちらと朔を見た。

お待たせしました、とウエートレスが珈琲カップをテーブルにのせて向こうへ行くと、朔は背筋を伸ばした。

「スポーツって小学校の頃にやってたくらいで、走るのも得意じゃないし、正直言うと体力とか自信ないんですけど」

境野はうんうんと頷いて、イスの背からからだを離れた。

「体力云々っていうのは気にしなくてもいいと思うよ。そんなのはトレーニングしていけば自然とついていくしね。それにマラソンっていったっていきなり四十二・十九五キロ走らなきゃいけないなんてことはないんだから。大会にしたってハーフもあるし、五キロとか十キロなんていうレースもあるから。僕としてはランナーが増えてくれるっていうのは嬉しい」

「あの境野さんって」

おずおずと梓が口を挟むと、朔が口角をあげた。

「盲学校の先生でブライントマラソンをやっている人がいて、境野さんはその先生の伴走者。で、陸上部のコーチもやってくれてる」

「コーチっていつでも月に一、二度行けるかどうか、って程度なんだけどね」

境野は額をこすりながら、まあ僕のことはどうでもいいんだけど眉を動かした。

「滝本君がやってみたいというなら、もちろん協力はするよ。まずは練習だけど、日曜に代々木公園で練習会をやってるから、そこに参加してみたらどうだろう」

「代々木公園ですか」

「毎月第一日曜にやってるから」

「でも、いきなりそんなところへ行って大丈夫？」

梓が朔の表情をうかがうように言うと、境野はにと笑った。

「ウォーキングの人もいるし、走力に応じて練習するから心配はないよ。走れる格好だけできてくれれば、伴走者もそのときに(注三) マッチングするし」

「伴走者ですけど」

「ん？」

「練習会に、伴走者も一緒に参加することはできますか？」

「え、もう決まってるの？」

驚いたように言う境野に、「はい」と朔は頷いた。

「あ、もしかして上城さん？」

「わたし？」

「じゃないです」と朔はかぶりを降った。

「弟に、頼たのむつもりです」

梓はことばを呑み込むようにして、朔の横顔を見た。

「弟クンかあ、いまいくつ？」

「高校一年生で、もうすぐ十六になります」

境野は低くうなりながらカップを口に運んだ。

「高校生は、ダメですか？」

「ダメっていうことはないんだよ」

カチャツと音を立ててカップをソーサーの上に戻した。

「でも」

「でも？」

「兄弟っていうのは、なかなか難しいと思うよ」

「それでも、オレは弟に伴走してもらいたいんです」

境野は朔をじっと見て、ゆっくり頷いた。

「それなら今度の日曜日、代々木公園に来られる？ 僕が君たちの練習に付き合うよ」

「でも、練習会があるならそのときに」

「今月はもう終わっちゃったんだよね。代々木公園ではほかの団体も練習会をやっているから、それに参加してもいいんだけど……。最初は僕のほうが気兼ねないだろう？」

「それは、はい」

「なら日曜日、ふたりで来なよ。言っておくけど、(注四)レクチャーを受けないまま練習を始めさせるわけにはいかないからね」

境野の口調は柔らかいけれど、ことばには毅然きぜんとした厳しさが混じっていた。

「伴走者には資格もなければ、特別な技術が必要なわけでもない。それでも視覚障がい者についての基礎的な知識や、伴走にあたっての注意点を知らないまま練習をスタートするのは、僕は認めないからね」

「わかりました。よろしくお願いします」

境野は「おう」と応えてカップを口に運んだ。

小一時間ほど話をしたあと、境野は一足先に店を出た。梓は母のパフェを追加で注文してから、視線をあげた。

「新ちゃんのため？」

「ん？」

「ブラインドマラソン」

「そういうわけじゃないよ」

「じゃあどういうわけ？」

朔は水滴のついたグラスに指を当てた。

「べつに。なにかを始めてみたいと思って」

「でも、走るの好きじゃないでしょ。なにかを始めてみたいっていうのは、わかるんだけど、マラソンって朔っぽくないよ」

「だからだよ」

「だから？」

そう、と朔はひと言言って冷めた珈琲を口に含んだ。

「いままでのオレとは違うことをしてみたいんだ。どうせ始めるなら、見えていたときのオレなら絶対にしていなかったことをしたい」

「……………」

お待ちせしました、とウエートレスがパフエを運んできた。

梓は生クリームをスプーンですくって、いたずらそうな笑みを浮かべて朔の顔に近づけた。

⑤じゃあ、これも食べてみる？」

甘いクリームあまの匂いに朔は苦笑した。

「それはいいや」

「なーんだ、つまんない」梓はクリームをぱくりとした。

(いとうみく『朔と新』)

(注一) 白杖つえ⇨視覚に障がいのある人が歩行する際、使用する白い杖。

(注二) ブラインドマラソン⇨視覚に障がいのある人が走るマラソン。

(注三) マッチング⇨組み合わせること。

(注四) レクチャー⇨説明。